

21世紀にキリストを生きる

21世紀にキリストを生きる

希望と新しい課題：1990-2011年の世界を振り返って

<5才未満の子ども死亡率からみた変化>

「私が託した賜物と潜在力すべてを使って、与えたいのちを生きて欲しい。」心からこう願う正義と愛の創造主がとても喜んでいてに違いない！情報を先日、目にした。2012年後半にユニセフがまとめた世界の5才未満の子どもの1990年から2011年までの死亡数と割合の推移だ。1990年に5才以前に亡くなる子どもの数は約1200万人だったが、2011年には世界人口が大きく増加したにも関わらず、690万人にまで減少した。1990年には11人にひとりの子は、5才の誕生日を迎えることができなかったのが、2011年には20人にひとりまで減ったのだ。

21世紀、いのちを造り贖うほどに一人ひとりを愛されている聖書の神の思いを共有する人々が、世界中に広がっている。強い決意で、幼い子どもの命が失われないようにと今日も活動を続けている。

<今、見える90年代のバングラデシュで、私が学んだこと>

1990年は、世界の最貧困国のひとつだったバングラデシュに私が出かけた年だ。1990年にバングラデシュで5才未満の子が命を失う割合は7人にひとりだった。21年後の2011年には22人にひとりになり、1990年の3分の1に減った。あの当時、何人ものお母さんたちから我が子を失った辛い話を聞いたことを思い出す。

90年代、バングラデシュのスラムや農村の貧しい地域でいのちが活かされるようにと地域の人々と関わったことを2013年の今、あらためて振り返ってみた。なぜ、こ

こまで減ったのか。「援助のザル」と言われたバングラデシュでは、お金によって専門の医療者や施設を増やす方策では底辺に行き渡らず「焼け石に水」だった。成功の秘訣は、聖書の神が造った人の体に備わった「病気を克服し予防する力」に着目した方策を推進したからだろう。下痢のとき誰でもできる脱水への対処法や見過ごされていた野菜でのビタミン補給をロコミや図解で普及したこと、予防重視のワクチンやビタミンAカプセルの普及、母乳の効用理解と実践の徹底、衛生状態向上のためのシンプルなトイレ作りなど。予防可能な病気で栄養失調が進んだ子どもの治療を専門病院で見守ったことがある。そもそも、病院までたどり着く家族は非常に限られていた。だから、貧しい人々が専門施設に行かないで、地域で「今、人の内にある力」を最大限にする働きかけに着目したのは当然だった。

私がバングラデシュの貧しい人々の間で学んだのは、高度な技術や施設作りといった外部からの「お金ありき」に頼るのでなく、人間に本来、与えられている「病気を克服し予防する力」を見直すことだった。

- 「人を生かす知識」を誰もが実践できる形で紹介すること
- その実践には「地域社会の人々の協力」が欠かせないこと
- 人が主体的に頭と体を動かす「いのちを生かすモノづくり」を推進すること

みなが生きて喜びを感じる社会は「人を生かす」知識の普及と協力関係を推進しようと、誰もが主体的に参加する社会だ。神が造られた姿に回復される姿がここにある。

＜5才未満子ども死亡数にみる21世紀世界の課題と対応—国内格差を克服するもの＞

2011年の世界で5才未満の子ども死亡数が最も多い国はどこか。

答えはインド。あと10年で世界最大の人口大国となるインドでは2011年、約170万のいのちが5才の誕生日を迎えることができなかった。世界のIT産業の中核になり、大金持ちと中産階層が急速に増えているインドは、一方で、人口の4割近くの約5億人が極貧に喘いでいる。

1990年当時、バングラデシュはインドより劣悪な状況だった。90年代、バングラデシュの人々は隣国の大国インドを羨望の目で眺めていた。それが2011年にバングラデシュでは5才未満の死亡が22人にひとりまで減ったのに対し、インドでは16人にひとりと緩やかな下降に留まっている。

数年前に北インドを訪問した時、同じ南アジア文化圏でも、農村部のインドはバングラデシュより対人関係がきつい感じを受けた。農村では、生まれで上下関係が決まるカースト制度が今も慣習として人々の心に根づいているからだろうか。バングラデシュで、子どもの死亡減少に貢献した「人

を生かす地域住民連携」というソフト面が大きく進んだ90年代、2000年代に比べると、北インドの地域での住民連携は、これからが本番なのかもしれない。

この2年半、「声なき者の友の輪」では、「人と社会をどう見るかが変わると、隣人を生かす行動につながる」という前提に立って活動するインドのパートナーと協力してきた。始まったばかりだが、そこから見えることは「人やものの見方・考え方」が変わり実践する人が起こされると「人を生かす」社会が生まれるということだ。

世界中の国に広がる「格差」への対応を「富の再分配」に限定した問題解決に依存すると、20世紀の資本主義と社会主義の確執の二の舞になるだけかもしれない。

経済面だけでなく、すべての面で人間が本来、造られた姿に回復されて生かされること。聖書が伝え続けている「人間の見方」、そして、すぐ目に見える因果応報とは異なる「歴史やものごとの見方」を実践に移すことこそ、情報処理の加速化と国境なき自由を、神のようにみなす「効率」に注ぎ込んだ結果の「21世紀の人間破壊」に対して、私たちが取り組むことではないかと思う。

重大原発事故後のライフスタイルを考え続けて

＜あれから2年—問われているライフスタイル＞

あれから2年経った。この数週間、関東に住む私は「重大原発事故」と火力発電所損壊のため続いた「計画停電」を思い巡らし、「21世紀のライフスタイル」をさらに考える時期だと感じている。

「便利で快適。その生活を追求し続けるのは当然。」これを可能にしてくれたのが原子力も含めたエネルギーだ。18世紀のヨーロッパ産業革命から始まったエネルギー使用での「快適・便利さ」を「進歩の基準」とすることが、20世紀後半には全世界に広がり、現代ではどの社会でも目標になった。

「快適・便利さ」を西欧に続いて、いち早く取り入れた日本はこの150年間、死に物狂いだった。その国で今、80を過ぎた父は車の便利さに勝てず足腰が弱り、近所に歩いて買い物に行くことが億劫だそう。私も、高齢や障害の方に助かるエスカレーターがどこにでも設置された便利な日常に、ずぼらさが加わり、体力は??だ。「便利で快適」なライフスタイルを一億二千万人で追求した結果、日本の私たちは、生きる基盤の「基礎体力」が、だいぶ落ちた。また、近くに24時間営業のコンビニがあり、電話一本、インターネットのクリック一つで、気を遣う人間関係に煩わされないで自分が

願う状況を整えられる。お陰で私たちの「人間関係向上力・維持力」もがた減りした気がしてならない。悪く言えば、自分以外の他人がみな、自分を満足させてくれるモノになってしまう社会に変質したようだ。

「この瞬間が便利で快適なライフスタイル」は、私たちが人として本来、喜びを感じるはずの人間関係や体力づくりをこっそり奪っているのかもしれない。「自分も他人も与えられた命の100%を生きるライフスタイル」からだいぶ離れてしまったようだ。**＜これからのエネルギーを考えるために始めること＞**

前号でも記したが、少数の経済先進国以外では、21世紀の今でも突然の停電は当たり前だ。その経験をしなくてすんだ過去50年近くの日本は、世界で特権階級の地位にいた。それを可能にする莫大な資源を買い入れる国の経済力があつた。

イエス・キリストが生きた時代に目を向けると、当時のエネルギーは灯り用の植物油であり、最速の移動手段は馬だった。イエスご自身はほぼ徒歩で移動し、日が昇ると活動を始め、日が落ちると食事や休息に入られた。ケータイもインターネットもなかったが、宇宙の創造主、すべてにご計画を持っておられる父である神との交信を絶やさなかった。エネルギーも現代の便利で快適なモノも何も持たなかったが、人間として、魂も身体も人との関係も知恵も100%成熟し、充実した日々を生きておられた。そして、世界を変えるご自分の使命を十字架の死まで、一日一日、忠実に成し遂げられていた。

韓国訪問：韓国教会と社会からの学び

＜激変する韓国社会と仕える教会＞

前号で皆さまに祈りをお願いした韓国訪問に、主は豊かに応えてくださった。

現代韓国社会は世界最先端に行く激変を経験している。高速インターネットにつな

21世紀の現代社会にエネルギーはいらないとは思わないが、エネルギーで支えられていたことに気づこうとしなかった20世紀後半の「日本人の私」から卒業する時なのだと思う。東日本大震災と重大原発事故は、「エネルギーとは何か。これからのエネルギーをどうするか」を考えるとときであることに目覚めさせてくれた。

最近、エコ家電が次々に登場しエネルギー消費が少ないと宣伝している。が、これは根本的な課題解決にはなっていない。これまでのライフスタイルを変える必要がないからだ。けれども「自分も他人も与えられた命の100%を生きるライフスタイル」を真剣に追求し始めると、何のためにエネルギーを消費するモノを使い、また、あえて使わないかという本質を整理しなければならないことに気づかされる。

イエスの歩みが最高の人間のモデルであるなら、その姿の本質に近づくのに「便利で快適」は基準にならないだろう。「これ・このやり方は、魂も体も関係性もすべて面で人が生かされる状況を生み出しているだろうか。」どのエネルギー資源を使うかという議論に突入する前に、エネルギーで自分も含めてすべての人がどう生きていくのかを考えたい。その延長線上に、どのエネルギー資源をどのような形で使うことが「人を生かす」かが見えてくるだろう。

私がまず始めることは、大きな荷物がなければ、エスカレーターを使わないことかならうか…。(地下深い地下鉄や空高い高層ビルではどうしよう?)

がるインフラは世界一。10年ほど前、日本では聞いたことがなかったブログが当時の韓国の若者たちの間では当たり前で、驚いた記憶がある。人口が日本の半分以下の韓国では、未来の人口減少を見越して10年近

く前に移民政策を導入した。21世紀世界の根幹となったIT化とグローバル化に韓国社会は政策・システムレベルで素早く対応し続けた。一方、あまりの急速変貌に社会にひずみも生じ、自殺率、離婚率はいまや日本を上回っている。今回出会った歴史学者のキム氏は留学4-5年後に国に戻った数年前、あまりの社会の変化に「ついていけなかった。」と語っていた。

世界最先端の変貌を経験している社会で、メガ化ではなく、キリストの体の本質を見究めながら地域に仕えてきた韓国教会の10年の歩みをかの地で聞くことができた。多くの教会が社会同様、「見た目」と「数字」を追求するなかで、大勢に流れずに地域の「キリストの体」のあり方に取り組んできた教会だ。地域の「からし種」として歩んでいる姿にとても励まされた。

今回、韓国のキリスト者と20世紀前半に日本による朝鮮半島植民地化時代の歴史を遺した場所を訪れた。双方の側に、国家を超えて命を生かした人と命を抹殺した人の二種類の人がいたことを知った。開国以来、日本は西欧の「国家主義」に倣い「富国」を目標として資源獲得のために朝鮮半島、満州に手を伸ばした。その時代の「帝国・日本」で国家の目標だった「天皇の神格化による富国」に屈服することなく、国を超えて「ひとの命」を選んだ人がいた。韓国側でも、後の武力社会主義者の動乱のなかで敵の命を救った牧師がいた。

21世紀の今、「個人の便利さ・快適さ」を保証するため、エネルギーの資源確保に

つながる領土問題で「国」が強硬に出ることを是とする空気が漂っている。個人の欲望を国家にカモフラージュした「新・国家主義?!」が広がっているのだろうか。21世紀に戦争が起こるとしたら、それは国家の責任というより、「私」の責任になるだろう。韓国訪問は、21世紀に「私の欲望」、「国家と私」、「民族を超えて命を選ぶ次世代育成」など密封されていた課題を熟考し、行動に移すときが来たことを指し示してくれた。何よりもまず、「自らの頭で考え命を選んで行動する」資質を私たちのうちに育む大切さを。

「お祈りください」

- **2013年4月、福島県訪問：**被災後2年を経た福島県へ。今も苦闘している方々の声を聞き、目指す未来を共に祈り、深めるときとなりますように。
- **2013年5月末-6月初め、バングラデシュ訪問：**「援助のザル」から脱皮したバングラデシュで、新たな課題と格闘を続けるリーダー達との交流のため。

2013年は、21世紀の転換期を進む世界と日本の大きな節目の年となるように思います。この受難節のとき、皆さまに語りかけられる主のかすかなみ声が、主からの希望と励まし、そして一步を踏み出す支えでありますように心からお祈りして。

柳沢 美登里

2013年3月13日

「声なき者の友の輪・Friends with the voiceless International (FVI)」の働きのために、お祈りとご支援をよろしくお願いいたします。活動報告は随時、ホームページ <http://www.karashi.net> でご覧いただけます。

郵便振替：名称 FVI 口座番号 00180-0-300201

柳沢へのご支援は「柳沢支援」と明記ください。領収書は振込票で代わりとさせていただきます。ご了承ください。主の働きを共にさせていただく恵みを感謝して。